学校・家庭・地域でがっちりスクラム
ぼくたち、わたしたちの京都の教育

NHKスペシャルで学力日本一と特集番組

「学力」が論議されている今、京都市の教育改革が全国から注目されています。平成15年11月には「NHKスペシャル『学校は変わるか、学力No.1に学べ』」で、京都市立学校の取組が大々的に報道され、大きな反響を呼びました。

京都市では、これまでから学力向上を最大の目標に、全国唯一発展的な内容を盛り込んだ「京都市スタンダード（京都市版指導計画）」（※1）や、どの子にもやる気と自信を育てる本市独自の補充・発展学習用教材「わかる・のばす学びの事例集」などを全校で活用。また、政令指定都市で唯一、小中学校全校・全学年で京都市独自の学力定着テスト（※2）を毎年実施し、その結果をもとに「確かな学力向上」の取組を展開しています。

さらに、児童生徒の習熟の程度や興味・関心に応じた「少人数教育」（※3）による指導が積極的に行われるとともに、独自予算で教員を任用し、小学1・2年生で政令指定都市初の「35人学級」が実施されています。

今回は、学校・家庭・地域から、さまざまな方々に京都の教育への期待について語っていただき、そのダイナミックな実践の一端を紹介するとともに、学校・家庭・地域をあげて、新たな前進を市民ぐるみで目指していきたいと考えています。

（注）※印の取組は、3面「全国から熱いまなざし「京都の教育」独自の取組例」を参照してください。

小学校国語科「わかる・のばす」学びの事例集（補充・発展事例集）
小学校算数科「わかる・のばす」学
小学校社会科「わかる・のばす」学
京都市立小学校教育課程 指導計画 第2学年
平成17年
京都市教育委員会

本市独自の「わかる・のばす」事例集（左）と京都市スタンダード（右）

学校で

一人一人の子どもを徹底的に大切に

野田卓郎
京都市小学校長会長
西陣中央小学校長

本市では、どの子も「確かな学力」をしっかり身につけ、いきいきと輝くことを目指し、指導方法を工夫するなど、きめ細かな指導に取り組んでいます。

例えば、高学年では積極的に「教科担任制」（※4）を取り入れ、教員の得意分野を生かした授業を展開。子どもたちの学習に対する興味・関心を高め、どの子どもにも分かる、楽しい授業を目指しています。

さらに、小学1・2年での35人学級や2人の教員による指導をはじめ、多くの学校が算数や理科などで積極的に少人数授業を取り入れています。子どもたちの興味・関心や習熟の程度に応じて少人数のグループを編成し、どの子も意欲的に学習に参加できるように授業を工夫しています。

こうした学習の成果は、毎年全学年で実施される京都市独自の学力定着テストにより確かめられ、更なる学力向上に役立てています。一人一人の子どもを徹底的に大切にする教育の伝統は、今も本市で脈々と受け継がれています。

一人一人を徹底的に大切にする少人数指導

小学校から始まるALTとの「英語活動」

直山木綿子
京都市総合教育センター
指導主事

学校の廊下や教室で子どもたちに英語で話しかけると、自分が知っている英語で答えたり、日本語で自分の思いを相手に臆することなく伝えたりしようとする子どもたちをよく見かけるようになりました。英語に興味・関心を持ち、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする子どもたちの育成をめざして、全ての中学校区内の小・中学校を一人のALT（外国人英語指導助手）が巡回指導に当たるなど、小学校同士や小・中学校の連携による英語教育を進めています。（※5）

また、本市独自の「指導計画と活動事例集」を基に、担任やALTが、子どもたちの興味ある題材や活動で授業を組み立てたり、カリキュラム開発支援センター（※6）に設置された「小学校英語リソースコーナー」から必要な資料や教材を借りたりして、英語活動を進めています。

さらに、夏休みや夜間に開かれる研修に参加するなど、すべての子どもたちが「英語って楽しい。」と言えるような授業を目指して、日夜努力しています。

全小学校で始まったALTによる英語活動

家庭で

家庭との連携で子どもたちに「学ぶ力」を

石原峰子
西院小教諭

教育の原点は「家庭」にあります。子どもは家族との温かい関わりや体験を通して多くのことを学び、たくましく成長します。家庭と学校がお互いに連携・協力して初めて、子どもたちの「学ぶ力」が身につくと考えています。

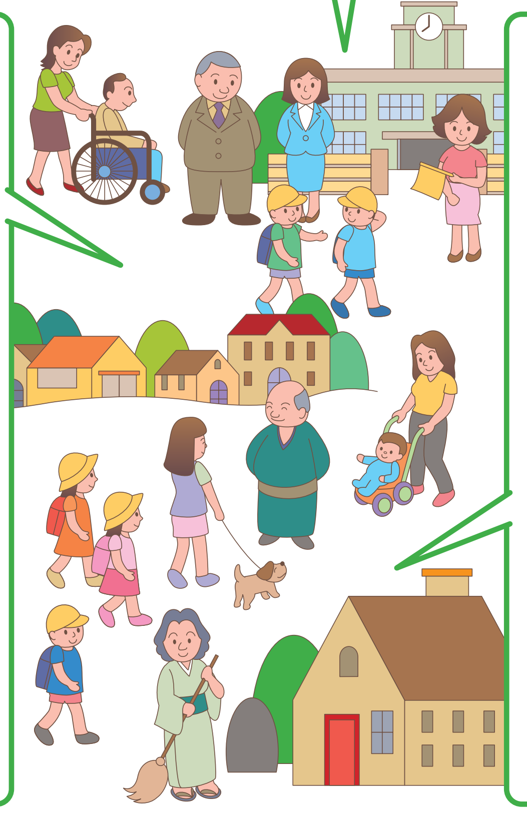
この4月に、私たち小中学校の教員は、PTAや「おやじの会」、校長会の代表の方々とともに、家庭学習の手引き「家庭を学びの環境に～すすんで学ぶ子を目指して～」を作成。全家庭に配布しました。

昨年度、「家族の宿題」のアピールが大きな反響を呼んだように、この「家庭学習の手引き」でも、家庭での早寝早起きや挨拶、家事の分担など、基本的な生活習慣としつけの徹底が子どもたちの「学ぶ力」の土台であり、「家庭を学びの環境に整える」ことの大切さを家庭に提言し、実践がはじまっています。

今後も、私たちは、子どもたちの「確かな学びと豊かな育ち」を目指し、日々家庭や地域との連携に努めたいと願っています。

夏休み 家族の宿題
家庭学習の手引き
家庭を学びの環境に
～すすんで学ぶ子どもを目指して～

全保護者配布の家族の宿題（左）と家庭学習の手引き（右）



地域で

地域で育つ。地域から学ぶ。

村岡省子
京都市小学校
PTA連絡協議会副会長

小6、中1、高1の子を持つ母親として、ずっと京都で子育てをしてきました。京都では地域で子どもたちを守る、それが当たり前みたいになっているんですね。例えば自転車の「防犯パトロール」のステッカー。うちの学校ではPTAだけでなく、近所のおじいちゃんやおばあちゃんも付けていただいています。

地域では子どもたちも、お年寄りもみんな大事にしてもらえる。そして子どももお年寄りを大事にしています。学校で子どもたちはお年寄りへ年賀状や運動会などの案内状を送り、お年寄りからは、お手紙ありがとうと返事が来ます。核家族化が進む中、得がたい経験が地域の温もりの中で実現し、子どもたちみんながやさしい気持ちになるように育ててもらっています。

私は、いろんな子がともに学び育つ、これが地域で学ぶ公立学校の特色だと思います。いろんな体験を通して、いろんな思いを持った、そんな子どもたちの中で私は子どもを育てたいと思います。

地域ぐるみでの学校支援が、京都の伝統

浅岡美恵
弁護士・
気候ネットワーク代表

わたしの子どもは元冨有小（現御所南小）の出身で、小中ともに市立校でした。どの先生も子どもの名前をすべて覚えておられ、きめ細かな指導がなされ、ゆったりした環境の中で教育が行われていました。

地域の方々が子どもたちに剣道を教えられ、保護者が体育館の掃除をするなど、学校とともに教育を進めるという気風がありました。その後、御所南小に統合されましたが、今でも当時お世話になった先生方と時々お会いしたり、手紙のやりとりをしたりしているようです。先生方も懸命に子どもたちに接していただき、先生方、お一人お一人のよさや持ち味が子どもたちに伝わったものと思っています。

今、京都市の教育が全国的に注目を浴びています。学校自身が自主的な教育活動を展開し、地域の方が学校に関りやすい雰囲気があり、それは明治の番組小学校創立時の京都の伝統的な教育風土が根付いているからでしょう。

卒業生等からのメッセージ

地元の学校でしっかり学び、大学進学

下村卓也さん
京都大学工学部
電子工学科2年
御所南小、柳池中、堀川高卒

僕は小中高と、すべて地元の学校で過ごしました。それぞれの学校でしっかり学ぶことで、大学進学という希望を叶え、大学生になった今も京都にいます。また、僕は小学校のときからボーイスカウト活動を行っており、アウトドア・ボランティアなどさまざまな活動をしてきました。今はもうリーダーとして子どもを育てる側です。

「地元っていいな……。でも、なぜいいのだろう。」そして、いつも同じ答えにたどりつきます。それは長い付き合いの友達・知り合いがたくさんいるから。

僕は生きる上でもっとも重要なことは人間関係だと思います。一人一人がそれぞれの良さを持っていて、その一人一人から「何か」を学び、いろいろな考え方を知ることで、充実した毎日を送ることができるようになる。しかし、人から学ぶには、時間と深い人間関係を築くことが必要です。「地元」で学ぶことは、そういう面からも理想的です。

目指すは、お世話になった熱意あふれる先生

山内香代さん
京都教育大学
教育学部1年
神川小、神川中、塔南高卒

近所の仲間は皆、同じ小中学校でした。同学年だけでなく、年上や年下の友達も多く、大人の方たちともよく挨拶をします。地域運動会、ラジオ体操、地蔵盆……さまざまな行事に恵まれ、地域の中で皆仲良く育っていきました。京都教育大に入学し、教師を目指す立場から振り返ると、公立学校は地域とのつながりができると気づかされます。

小学校時代、大文字駅伝を熱心にご指導くださったA先生の温かい励ましの一言。高校時代に触れたバスケット部顧問のB先生の教科指導や部活動にかける情熱。大学受験に向けては、授業の他、進学補習や学習合宿等で学力を鍛えていただき、小論文・面接練習に何度も繰返し付き合っていただきました。「こんな風に生徒のために一生懸命になれる先生に私もなりたい」—多くのすばらしい先生や友達に出会い、今ここに教師を目指す私がいます。

ここまでこれたのは先生方のおかげ

唐津謙一さん
京都大学理学部
物理学科4年
御室小、双ケ丘中、紫野高卒

小中高を通して、与えられたことだけをこなすのではなく、自主的に「次は何をしなければならないのか」ということを考えられるようになりました。これは、「受験」のみを視野に入れた教育ではなく、長い視点で見た、本当の意味で将来につながる教育を受けることができたためだと思っています。

生徒を一人の人間として捉え、生徒が学校生活や将来のことで悩んだときには人生の先輩としてアドバイスをし、一人の人間として成長していくのをサポートするような教員がいる学校こそが本当の教育の場であると思うのです。

実際、僕自身も進路に悩んだり、勉強する気がなくなったとき、生徒の気持ちに配慮した、真の意味で大人的なアドバイスとサポートを先生方からしていただいたからこそ、ここまで来ることができたのだと思います。

京都を離れても銅駝美工で過ごした日々を胸に歩んでいます

寺内梨恵さん
筑波大学
芸術学群1年
深草小、深草中、銅駝美術工芸高卒

中学生の時、銅駝高の美工展を見て「私もこんな作品を作りたい」という思いで一杯になりました。中学校の先生方の熱心な指導もあって合格。新しい世界で新しい人々、新しい自分と出会いました。高校での3年間は美工展への作品制作で過ぎ、泣いたり、投げ出したくなったりすることも何度もあったけど、その度に先生に叱咤され、友達とも励ましあって、何とか期日に間に合い作品を完成した時の達成感は何ものにも替え難かったです。

それにしても、苦しい時もあったはずなのに、なぜあんなにも学校が心地良かったのか。今になって思えば、高校はなにもかもに恵まれていました。専門の道に優れた先生方、整った設備、同じ志を抱く友人たち、そして、レトロで優しい校舎と校庭の隣を流れる鴨川。

私の故郷は京都。でもそれ以上に私の故郷は銅駝です。大学に入ってからしばらくはホームシックで、高校が恋しくて恋しくてたまらなかったけど、今は立ち直り、再び新しい自分と出会うために日々を歩んでいます。これまで関わってきた多くの人、先生方や友人や親を、裏切らない自分であり続けたいという思いを胸に。

先生方からの指導が今の仕事に役立っています

沼本将太さん
株式会社
堀場製作所勤務
砂川小、藤森中、伏見工業高卒

小中学校時代、私は野球に明け暮れていました。夏になると、自分の季節が来たなと今だに感じています。中学校での監督の先生はとても厳しい方で、野球を通じて、挨拶の大切さ、敬語の使い方など、人間として大切なことを教えていただきました。そのことが、社会人として生きていくための基礎づくりであったと、今あらためて感謝しています。

高校では、人間として必要な教養だけでなく、工業高校でしかできない課題研究や実習、インターンシップを通して、最新の技術、さらにはものづくりの楽しさ、働くことの大切さなどを学ぶことができました。また、進路選択で悩んでいた時には、担任の先生をはじめ、多くの先生が親身に指導してくださり、内定を我が事のように喜んでいただきました。

今、仕事は覚えることが一杯で大変ですが、とてもやりがいがあり、生涯懸けて働く価値のある職場です。小中高を通じて身につけた知識や考え方に自信をもって、日々頑張っています。

今春、お子たちが洛風中から高校進学
洛風中学校と出会って

保護者Aさん

私の子どもは学校に行けない子でした。しかし、学校に行けないことは決して学校に行きたくない、学びたくないことではありません。自分はこれではいけない、何とかしたいと思う気持ちは伝わってきました。

そんな時不登校生徒のために新たに開校される洛風中のことを知り、藁をもつかむ思いで申し込みました。なんとかがんばってほしいという期待とこの学校でも行けなくなったらという不安、毎日が祈るような思いで6ヶ月が過ぎました。そして、この春高校生になることができました。

今思うと、昨年の10月に洛風中に通うようになってから子どもの表情が明るくなり、学校のことも話してくれるようになっていました。やはり居場所が見つかったのだと思います。家庭でも先生の話を聞き、親も子どもとの関わりを考え直し、家族みんなで努力しました。様々な理由で閉ざされてしまった子どもの心を洛風中学校が開いてくれたと感謝しています。人と人の出会いが子どもの学びなおしたいという気持ちを支えてくれました。たくさんの人たちの願いと努力で実現されたこの出会いに感謝しています。

※市立洛風中は昨年10月、構造改革特区の認定を受け、政令指定都市で初めて、不登校生徒の学習支援のために開校した中学校

特別寄稿

京都の教育への期待

教育の原点

堀場雅夫
株式会社堀場製作所 最高顧問

私が朝学校へ行く時、必ずと言っていいぐらい「雅ちゃん、皆と仲ようせんとあかんえ。出すぎたらあかんえ。」耳がたこになるとはこのことでしょう。私自身そんな喧嘩早いとか、番長型ではなかったんですが。もちろん70数年後の今でも皆喧嘩せず仲良く、互いに譲り合いながら楽しく暮らせたら本当によいと思います。

しかし現実はこのような護送船団方式では世界で生き残ることは極めて難しい世になりました。国家も、都市も、企業も、個人も自身の持つ価値観、信念、哲学を明確にして他人に自分の考えを正しく理解させねばなりません。決して同調さすのではなく、あの人は、あの国は、そんな考え方で生きている人だということを知らしめると同時に相手の考え方も理解するべく努力が必要です。

インターナショナル化とかグローバル化、国家とはまさに相互理解することにあると思います。それにはまず自分を知ることから始まります。自分の信念とは自国の価値観とは何か、教育の原点とはこんなところにあるのではないでしょうか。

全国から熱いまなざし「京都の教育」独自の取組例

1.学力向上京都市スタンダード（京都市版指導計画）

国が定めた学習指導要領を超えた「発展的な学習」をすべての児童生徒に指導することを盛り込んだ,全国唯一の詳細な指導計画。その指導の授業時間を確保するため,全校で夏休みを短縮しています。さらに,「補習」や「家庭学習」ともリンクさせ,一人一人の学力実態に応じた指導の充実,教師の指導力向上に努めています。

2.京都市学力定着テスト

小学1年から中学3年まで,すべての学校で児童生徒の「学力」が確実に身についたかどうか,全国唯一,毎年テストを実施し,一人一人のきめ細かな指導に生かされています。これは,戦後一貫して続けられてきた,教員らの研究会と市教委が合同で実施してきた学力テストの伝統と実績に基づくもので,全国から注目されています。

3.少人数教育

政令指定都市唯一,本市独自に教員を増員し,少人数教育等を推進。現在,小学1,2年生で35人学級,他学年や中学でも児童生徒の習熟の程度や興味・関心別に,少人数によるきめ細かな指導を積極的に行っています。

4.小学校における教科担任制

中学校での教科担任制を視野に入れ,小学校の高学年でも教師の専門性を生かし,教科担任制を導入。複数の教師の目を通した指導の充実が図られています。音楽や図工などで専門の教員が指導する「専科教育」とともに,より質の高い授業で学力向上を目指しています。

5.小学校英語

全国に先駆け,11年度からすべての小学校で実施している英語活動を飛躍的に充実し,今年度から,外国人英語指導助手（ALT）を増員。すべての小中学校で「聞けて話せる」楽しい英語教育を推進しています。全国の先端を行く本市の実践を,昨年,第1回小学校英語全国大会,本年8月には「小学校英語教育国際シンポジウム」を京都で開催し,全国発信。

6.カリキュラム開発支援センター

学力向上のためには,教師の指導力向上が命。一昨年,京都市総合教育センターに全国初のカリキュラム開発支援センターを開設。8万点のすぐに役立つ,優れた教師の自作による指導案などをそろえ,夜9時まで,また土曜も開館。多くの教員が訪れ,自らの指導力向上のため実践的な研究を重ねるとともに,ベテランの指導主事らが支援しています。

（**本市の教師の指導力は全国トップ!** 例えば,文科省のIT社会への対応のカギとなる教師の指導力についての全国調査,昨年本市のコンピュータ操作可能教員は100%に,コンピュータを授業に使っての指導可能教員は95%で全国トップに。全国平均は68%。教師のモチベーションの高さと指導力向上の取組の成果と全国から賞賛されています。）

これら京都独自の取組や成果,また市民ぐるみでの「開かれた学校づくり」や,保護者や地域の方々が学校の取組を評価し,改善に活かす「外部評価を含めた学校評価システム」の全校実施などが注目され,国会議員や文科省,OECD,全国の教育関係者の視察がひっきりなし。

同時に,門川大作教育長は,中教審の幼児教育部会や地方教育行政部会等の委員を歴任。現在は,教員養成部会で専門職大学院や教員免許更新制の議論に参画。また,「学級編成と教職員配置等の在り方研究者会議」でも,京都市の実績をもとに,国の施策として全国で教員の増員等による指導の充実を強く主張しています。